

# 人々の心を一つにする黒獅子まつり



## 地域資源生かし

長井市観光協会

齋藤 和夫

県内には鹿子踊り、獅子舞が数多く残っている。長井市など西置賜地方は特に獅子舞が多い。その獅子舞の起源について、「長井市史」には、古くから雪解けの春から稲の取り入れの終わる秋祭りまで、いろいろな神社や寺院の祭礼で獅子舞が奉納されてきたことが記されている。

この獅子の起源に関係するものとして、唐代の詩人、白楽天の詩がある。「仮面に胡人獅子を飯る。木を刻して頭とし、糸にて尾を作る。金にて眼睛を鍍し、銀にて歯を帖す。奮起する毛衣、双耳をひらく。流沙に従い、万里より来るが如し。紫髯深目両胡の児」。この詩は古来より獅子舞を記した最も古いものと言われている。紫の頬ヒゲをもち、目のふちの深く窪んだ故人（崑崙人）が、両眼に金箔をはり、上下の歯を銀でくるんだ木彫りの獅子面をかぶって踊っている。その動きは激しく、頭の毛が舞い上り両方の耳があらわになると述べている。今、私たちが目に見える獅子の姿とよく似ている。だから、獅子舞

は西アジアで始まり、中国に伝わったものであろう。日本には中国から唐代に伝わったものらしい。その頃の遺品は正倉院に残っている。それは天平勝宝四年（七五二）に東大寺の大仏開眼供養の時の伎楽田のものといわれている。獅子頭は仏教とともにわが国に入り、今でも四天王寺の聖霊会で菩薩の舞や胡蝶の舞とともに獅子舞も行われている。

伝承では「康平六年（一〇六三）に源頼義が前九年の役の戦勝祝いに総宮神社（当時は白鳥大名神）の社殿を再建した時、軍士たちに獅子舞をさせたのが始まりである」という。長井市内の神社の獅子頭を調べてみると、最も古い年号の記入のあるものは総宮神社のもので「寛文十一年（一六七二）九月十九日改」と書かれてある。「改」とあるから、これ以前から獅子頭があったのであろう。長井市の中心街は以前から南北に宮地区と小出地区に分かれていたが、宮の神社に伝わる獅子舞の幕の裾は麻を使っていて、姿が水面に映ったようにできている。すきとおった麻布には波模

様が染められ、前幕には水面を進む時にできる波頭を表す模様が、横幕には波としぶきを表した模様がついている。

宮の獅子舞の起源は宮明神の縁起と深いかわりをもっている。総宮神宮は山号を「赤崩山」といい、火山活動をしていた頃の吾妻山の呼び名でもある。昔、日本武尊が東征した時、米沢盆地の人々は最上川の水害に苦しんでいたため、武尊は最上川の水源である赤崩山に剣を立てて祈り洪水を治めたという。それ以来、その御刀を神体として赤崩山神社が建立され、信仰の広まりとともに川西町小松に、そして長井市宮にも建てられた。

太古の人々の信仰に山岳信仰がある。深い山中には神が住み、川の上流には竜神が住むと信じられていた。野川の上流の白鳥沼には竜神が住み、野川の水を支配していると考えられていた。長井の人々は野川上流の山間地の三洲に神社を祀り、その里宮として白鳥神社を平野部に祀った。もう少し詳しくいえば、最上川の治水を祈って祀った開拓神赤崩山神社



勇壮そのものの獅子舞

と、野川の治水を願って祀った三洲神社の里宮白鳥神社とが、最上川、野川の合流点である扇状地の突端に合祀されたのが赤崩山白鳥神社である。だから、里宮の大祭には奥の院の三洲から大神を迎えることになる。三洲の神は卯の花姫伝承では姫が三洲に身を投じ、大蛇となったという。この大蛇が白鳥神社の祭礼に招かれ、野川の流れを下る姿が宮の獅子舞であるといわれている。長井市の獅子舞は、他地域のものと異なり、目玉が丸く飛び出て、眉が目玉の後方に下って、前後に面長な獅子として彫られ、獅子頭といわず蛇頭と言っている。それに波頭を表わした大幕をつけ、その中に多くの舞い手が入る、大幕多人数入り獅子となっている。舞い方も蛇行し、頭は一定の高さに保って上下せず、腰に動き

をつけて滑るように舞う。舞う姿は勇壮そのものであり、別名で「百足獅子」とも呼ばれている。

「ながい黒獅子まつり」はこのような地域文化の価値を再認識しようと平成二年に始まった。十三回目を数える今年も、市内に継承されてきた四十一（子供獅子を含む）の獅子舞の中から十五が参加し、これまでで最高の参加数となった。毎年、五月の最終土曜日に実施している。今年も水神様のご意向なのか、開始時に強い雨が降ったもののやがて晴れ間が出来、市街地の目抜き通りの南北コースなど三力所からそれぞれ同時に舞いがスタートし、笛と太鼓の囃子に合わせ沿道を埋めた人々が見守る中で黒獅子が躍動した。

長井市では黒獅子は五穀豊穡・交通安全・家内安全・身体堅固を祈願する伝統神事として長く受け継がれてきた。ながい黒獅子まつり」としての始まりは、松ヶ池公園（白つじ公園）一角の皇大神社に求めることもできる。以前は、五月の「白つじまつり」の終盤に、この神社の獅子舞が神社の前で舞われていた。長井市内には、四十を超える神社があり、皇大神社の獅子舞同様、それぞれに特徴ある獅子舞が受け継がれている。そこで、市内各神社の獅子舞が一堂に会して特徴を披露し合えたら素晴らしいという長井市観光協会の前会長である竹田昭三氏の発想からまつりが始まったのである。回を重ねるごとに舞いを待ってくれる方々が増えている。

長井市には「あやめまつり」や「白つじまつり」などもあるが、今後は「黒獅子まつり」を最大のまつりとすることに情熱を注ぎたい。観光資源として大きな可能性を秘めて

いると思うからだ。特にこれまでは夜まつりとして開催してきたが、日中から実施し遠来の人々にもご覧いただけるようにすることを検討したい。学校も完全週休制にもなったことであるし、会社、事業所、役所等にも協力をいただきながら二日間のまつりに出来ないものかとも考えている。故郷を離れた方々にも懐かしいまつりの思い出をよみがえらせる機会を提供したいものである。心強いのは獅子を愛する多くの市民がいることである。

遠くから笛の音色と太鼓の響きが聞こえてくれば自ずと心が踊る。それが、この地で育った人々にとつての祭りであり、その火を消すことは出来ない。世相や風俗がどう変化しようとも、古くから伝わるこのまつりを守り続けたい。また、郷土意識や隣人意識が希薄な時代になっている。そんな時代だからこそ、篝火を焚いてお神酒で獅子を迎え、人々の幸せと社会の安穩を願う機会を大切にしたい。人々の心をつなぐ「黒獅子まつり」を継承していくことが、今を生きる私たちに与えられた役割であると思うている。

## 齋藤 和夫

(株)長井観光はぎ苑代表取締役

長井市観光協会会長

長井市白兔1,188

1933年 長井市白兔生まれ

1952年 山形県立長井高等学校卒業

1953年 殖産銀行長井支店入社

1970年 (株)長井観光はぎ苑入社

1982年 長井市観光協会常任理事

2001年 長井市観光協会会長